

2019年2月14日(木)

株式会社ジャパンディスプレイ

2018年度第3四半期(3Q) 決算説明会質疑応答

Q: 4Qおよび来期の業績の方向感は何ですか？

A: 4Qの売上高及び営業利益については現在も顧客と需要についての交渉を行っていることから、今後も変動があります。出来るだけ多くの受注を頂ける様、努力しているところです。
来期の業績見通しについては、構造改革を念頭に置いていることから現時点でのコメントは難しいものの、当然ながら業績の改善につなげていきたいと考えています。

Q: 売掛金及び買掛金の水準が高くなっているようだが、資金繰りの状況と合わせてどの様に考えているか？

A: 11月初旬にお客より需要減についての示唆があり、その後交渉によって一定の成果を得ることができた中、4Qの受注についても最大化を図るべく12月はフル稼働に近い水準で生産を行いました。そのため、12月末時点の売掛金及び買掛金の水準が高くなっています。

Q: 3Q及び4Qの工場稼働率ほどの程度であったか？

A: 工場別の稼働率は発表しておりませんが、3Qはほぼフル稼働しておりました。4Qについては50パーセント程度の稼働率を予想しております。

Q: 未収入金を含め在庫水準が増えているが、売上が想定を下回ったことで不動在庫は発生していないか？

A: 在庫については細かくモニターしており、現時点で不動在庫と認識している在庫は発生していません。

Q: 今後実施を検討している構造改革の中で、工場の減損の必要性の認識はあるか？

A: 3Qの決算でも監査法人と確認をしておりますが、3Q段階では減損の判定は行っておりません。4Q以降については、構造改革の検討を踏まえ、その中で必要性を確認して参ります。

Q: 来期の4~6月期以降のモバイルビジネスにおける需要をどのように見ているか？

A: 欧米向け、中国向け共に動きが鈍いため、今期と同様厳しく考える必要があるものと認識しています。

Q: 次の構造改革の具体的内容は現在検討中とのことではあるが、この構造改革は何を軸として行うのか？

A: 前回の構造改革では固定費を削減することに主眼を置きました。今回はスマートフォン一本足打法から脱却するスピードを上げ、製品ポートフォリオを変えることを主眼に置き、より収益の安定した事業形態に早く変えてまいります。

Q： スマートフォン向けディスプレイの顧客は液晶ディスプレイに何を求めているのか。これまで求めてきたものと変わってきているか。

A： まず、非常にコストを意識されています。スマートフォンのスペックはサチュレートしてきており、買い替えサイクルも伸びていることから、ユーザーに買い替えを促すために性能及びコストの両面のメリットが求められています。ハイエンドのスマートフォンでなければ使われていなかった技術が、ボリュームゾーンでも使われてきている中、次の製品としてディスプレイにこだわらずにスマートフォンに新しい技術を提供することに取り組んでいます。例えば、当社の薄膜技術を使ったセンサー技術をスマートフォン向けに使いたいとの要望がお客様からあり、そうした技術を使ってお客様に価値を提供していきたいと考えています。

Q： 車載ディスプレイ事業のマクロ要因をどのように評価しているか。19年度のリスクをどう見ているか。

A： 車載ディスプレイは年率2ケタ%の成長を維持しており、18年度もそこに近い伸びを見通しています。3Qまでは欧州の新しい排ガス規制に自動車メーカーが対応しきれず、検査待ちの車ができてしまったために需要が弱含んだことから、当社の販売は計画通りとなりませんでした。また、中国での新車販売も弱含んでおり、販売のスケジュールが若干遅延していることなどから、製品販売も期待したより伸びませんでした。4Qから排ガス問題は一巡した感が出ています。車載製品は約3年先までプロジェクトが決まっており、18年度は顧客需要に応えるために生産能力を増やしましたが、19年度は計画通り推移すると見込んでいます。

Q： 株式会社 INCJ からの「継続サポート」の意味合いをお話いただきたい。

A： 外部との提携交渉は非常に重要であることを INCJ 様にご理解いただいております。全面的サポートをいただいております。コミットメントラインの更改、保有いただいている株式・債権については、引き続き支援いただけると認識しています。

Q： これまでであれば INCJ から資金援助がされたと思うが、今後は同様のことができない可能性もあると思われる。そうした中、例えば蒸着方式の有機 EL (OLED) に対する支援ならしていただけるなど、内容によってサポートしてもらえる可能性はあるか。

A： 追加支援については当社がコメントできる立場になく、回答は控えさせていただきます。存じます。

Q： 成長投資を行う JIC (産業革新投資機構) への期待感はあるか。

A： 当社の筆頭株主は INCJ 様であり、同社とは今後も連携させていただきたいと考えています。JIC 様についてのコメントは差し控えさせていただきます。存じます。

Q： 茂原工場の蒸着 OLED の量産化は最終段階とのことだが、歩留まり状況、生産性状況、或いは顧客の関心についてなど、もう少し詳しく教えて欲しい。

A： 現在市場に出ている競合他社の OLED の性能を凌駕する性能が当社の OLED で出ています。歩留まりも量産が射程圏内に入ったと自負しています。複数のお客様とスペック議論をしており、お客様からも前向きなコメントを頂戴しています。茂原の OLED 生産ラインは、追加投資を行わずとも量産開始が可能で、あとはお客様とのスケジュール調整次第という状況です。

Q： 最近 OLED では、ドライバーの問題や画面が緑色になる問題などがあると思うが、そうした問題は解決しているのか。

A： OLED をどう駆動するかなどの技術ノウハウについては、当社はかなり自負を持っています。また、画面が緑色になる問題については、当社において同様な試験を行っても、同じ状況にはなっていません。

Q： JOLED との協業について触れているが、これはマーケティングや技術におけるものなのか、資金的な意味のあるものなのか。

A： これまでは開発支援及びバックプレーンの供給を行ってきましたが、現在は、受注から設計、生産、生産、品質保証、出荷に至る全てのオペレーションに関して、JDI が JOLED と一緒にやっていく協業を進めています。

以上